室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ハワイ語における2タイプの数詞文について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Hawaiian, Polynesian, Numeral 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2866

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ハワイ語における2タイプの数詞文について

その他（別言語等）のタイトル	Two Types of Numeral Sentences in Hawaiian
著者	塩谷　亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	52
ページ	105-110
発行年	2002-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2866

室工大紀要第52号(2002)105～110

ハワイ語における２タイプの数詞文について

塩谷　亨*1

Two Types of Numeral Sentences in Hawaiian

Toru SHIONOYA

（原稿受付日　平成14年５月７日　　論文受理日　平成14年８月30日）

Abstract
There are two types of numeral sentences in Hawaiian; (i) existential sentence type and (ii) equational sentence type. The two types differ semantically and structurally.

Keywords: Hawaiian, Polynesian, Numeral

1　はじめに

1.1　ポリネシア諸言語について

ポリネシア諸言語は地理上のポリネシア（ハワイ諸島、ニュージーランド、イースター島を３点とする三角形の内側）を中心とする地域で話されている。ポリネシア諸言語はお互いに共通の祖先を持つ親戚同士であり、系統的関係を持つ。共通の祖先から分岐して以来長い年月を経ているにもかかわらず、文法的、語彙的にはかなりの類似性を保っている。

本稿で扱うのはそのポリネシア諸言語の数詞文である。ポリネシア諸語の中でも、まず、ハワイ語の分析を行い、将来、そのハワイ語の分析結果を他のポリネシア諸言語へ適用したいと考えた。

*1　共通講座

1.2　数詞文とは

本稿で扱う数詞文とはどのようなものを指すのか、ハワイ語の例を用いて示す。ハワイ語の最も一般的な文の構造は次のように図式化できる。

ハワイ語の文構造：述語－主語－その他

ハワイ語の文は動詞述語文と名詞述語文の二種類に大きく分類されるが、そのいずれについても上記の図式に当てはめることができる。

(1) Ua　eo　kākou　i　ke　ali`i...
　完了　負ける　私達　～によって　冠詞　首長
　（述語）　(主語)（その他）
　「私達は首長によって負けた。」(1)

(2) Ma　ka　lani　ka　lā,..
　～に　冠詞　空　冠詞　太陽
　（述語）　(主語)
　「太陽は空に。」(2)

上記の例のうち(1)が動詞述語文の、(2)が名詞述語文の例である。(1)では動詞が述語として文頭に来て,その後ろに主語、そして更に後ろにその他の要素が来ている。(2)では前置詞 ma が付加された名詞句 ma ka lani「空に」が述語として文頭に来ている。

このようにいずれの場合にも述語は文頭に来るのが一般的な文構造である。この述語の位置、すなわち、文頭の部分に数詞が来ている文を総称して「数詞文」と呼ぶ。以下に数詞文の基本的なものを二つ例示する。

(3) ‘Ekolu kanaka　i　　ha’alele.
　　三　　人　　完了 去る
　「去った人は三人。」

(4) ‘Ehā kapuai　　kona　ki’eki’e.
　　四 フィート それの 高さ
　「それの高さは 4 フィート。」

このように(3)と(4)ではそれぞれ数詞‘ekolu「３」と‘ehā「４」が文頭、つまり述語の位置に来ている。また、それぞれ数詞の直後に冠詞等の要素を介さずに来ている名詞を便宜上、「数詞後名詞」と呼ぶことにする。(3)と(4)では kanaka「人」と kapuai「フィート」がそれぞれ数詞後名詞である。

1.3　先行研究と本稿の目的

塩谷[3]はハワイ語の数詞が品詞分類上どのような位置づけをなされるか分析を試みた際に、数詞文のいくつかの例を扱っているが、数詞がどのような環境で用いられるか分析することが主眼であったため、数詞文の文全体としての構造と意味に関する議論は十分になされなかった。そこで、本稿では、数詞という単語レベルに着目するのではなく、数詞文という構文全体としての記述を行い、その意味的、構造的な一般化を示すことを目的とする。

他の先行研究において数詞文の意味と構造について言及した例として、Alexander[4]が、「主語が普通名詞で英語だと"there"が前置されるような場合には不定冠詞 he か数詞が名詞の前に来る」と指摘している。

Elbert and Pukui[5]は本稿で言うところの数詞文に相当すると思われるいくつかの例文を訳文と共に挙げているが、いずれも、文としてではなく、名詞句として扱い、詳しい意味的、構造的議論は示していない。

また、本稿では新たに拡充した例文データベースを活用して、可能な限り多くの数詞文のパターンを網羅するように努力した。

2　分析データ

今回の分析に用いたデータベースに含まれるハワイ語文献の内訳は以下のとおりである。

Pukui and Green (1995)	民話
Beckwith (1911-1912)	民話
Fornander（1917-1918)	民話、伝統・風習
Nakuina (1902)	民話
Nakoa (1979)	小説
Beckwith (1932)	伝統・風習
Malo (1987)	伝統・風習
Na haiao (1841)	キリスト教関連
Hawaiian Laws (1994)	法律
Mookini (1985)	動物の紹介
Kuokoa	新聞（記事、読み物）
Ka Lama Hawaii	新聞（記事、読み物）
Ka Hoku o Hawaii	新聞（記事、読み物）
Kumu kamalii	新聞（キリスト教）

上記のように、民話から法律まで出来るだけ多様なジャンルからデータを集めた。

3　数詞文の諸例とその構造

3.1　数詞－名詞－名詞を修飾する語句

この章では、ハワイ語の数詞文の諸例をその構造によって大きく四つのグループに分類して、各グループのいろいろなパターンについて、その構造を記述していく。

第一のグループは、<数詞-名詞-名詞を修飾する語句>のように三つの要素からなる構造を持つ数詞文の例である。名詞を修飾する語句にはいろいろな要素が来る。以下に、それらを列挙する。

最もよく見られるパターンの一つは、名詞を修飾する語句として、前置詞が付加された名詞が来るパターンで、下記のように図式できる。

(I) 数詞－名詞－前置詞が付加された名詞

(5) .., ‘elua mau wahine ilaila, ..
　　二　複 女性　そこに
　「そこには女性が二人いた。」[6]

例文(5)の ilaila「そこに」は場所を示す前置詞 i と名詞 laila「そこ」が一語として書かれたものである。また、名詞 wahine「女性」の前にオプショナルな複数マーカーmau が付加されている。前置詞 i の他にもいろいろな前置詞があるが、このような数詞文に多用されるものの一つが属格「～の」を表す前置詞 o である。

(6) ‘Elua ‘ano o ka ‘ahu, ...
二 種類 属格 冠詞 衣服
「衣服の種類には二つある。」(7)

上記(6)は極シンプルな例であるが、属格の前置詞 o はかなり複雑な数詞文も作る。

(7) ho’okahi lā o kona noho ‘ana me kāna
1 日 属格 彼の 住む こと ～と 彼の
mau kaikamahine ma Honopuuwaiakua,..
複 娘 ～で Honopuuwaiakua
「Honopuuwaiakua で彼が娘達と住んだのは一日だった。」(8)

例(7)の構造は一見複雑であるが、直訳すると「Honopuuwaiakua で彼が娘達と住むことの日は１だ。」のようになり、下線部全体が、前置詞 o が付加された名詞句を構成している。従って、これもパターン（I）の例とみなすことができる。いろいろな行為の日数、年数など期間を表す表現がこのパターンで表される。

(8) ‘ekolu lā o ko Aukelenuiaiku hele ‘ana
3 日 属格 Aukeleniaiku-属格 行く こと
i ka lawai’a,..
～に 冠詞 釣り
「Aikelenuiaiku の釣りに出かけた日数は三日。」(1)

例(8)でも、直訳すると「Aukelenuiaiku の釣りに行くことの日が３だ。」のようになり、下線部全体が前置詞 o が付加された名詞句をなしている。

このグループに属するもう一つのパターンは名詞を修飾する語句として関係節が来る数詞文の例であり、その構造は次のように図式化される。

(II) 数詞－名詞－関係節

(9)‘ekolu keiki i hō’ole,...
三 子供 完了 断る
「断った子供は三人。」(1)

例(9)では下線部が「断った」という意味の関係節であり、その前の名詞 keiki「子供」を修飾している。この例は、先行詞が関係節自体の主語に相当するケースであるが、先行詞が関係節自体の主語ではないケースもある。その場合には、関係節自体の主語は例(10)のように属格名詞で表される。

(10) ‘ekolu malama o’u e ho’omākaukau ai
三 月 私-属格 未完了 準備する
no ka ho’āo o ‘olua,
～のために 冠詞 結婚 属格 あなた達-双数
「あなた達の結婚のために私が準備をする月が３ヶ月ある。」(8)

例(10)では下線部が「あなた達の結婚のために準備をする」という意味の関係節であり、その前の属格名詞 o’u「私の」が関係節自体の主語をあらわしている。全体で「私があなた達の結婚のために準備をする」という意味で前の名詞 malama「月」を修飾している。

3.2 数詞－属格名詞－名詞

第 2 のグループは＜数詞-属格名詞-名詞＞の三つの要素から成る数詞文の例である。このグループの構造は以下のように図式化される。

(III) 数詞－属格名詞（ゼロ所有形）－名詞

属格名詞と呼ばれるものには 3 種類あるが、ここで登場する属格名詞はゼロ所有形と呼ばれるもので、形の上でも意味の上でも、前の節の構造パターン（I）の事例として登場した属格の前置詞が付加された名詞句と同じ[1]である。ただし、このグループで登場する属格名詞（ゼロ所有形）は名詞の後ろではなく、前に置かれる。

このグループの中で最も一般的な数詞文は所有を表す構文である。

(11) .. ‘elua ona koa ikaika loa,..
二 彼-属格 戦士 強い とても
「彼にはとても強い戦士が二人いる。」(1)

例(11)では ona「彼の」がゼロ所有形であり、名詞 koa「戦士」の前に置かれている。

又、このパターンは行為や状態の期間を表すのにも使われる。

(12)..., ‘ehā o lākou malama i ka moana,..
4 彼ら-属格月 ～に 冠詞 海
「この航海で、彼らが洋上にいた月は４ヶ月。」(1)

---

1 例えば「彼らの、彼女らの」を表すゼロ所有形 o lākou は、実際には属格の前置詞 o「～の」を代名詞 lākou「彼ら、彼女ら」に付加した o lākou と同形である。

例(12)では o lākou「彼らの」がゼロ所有形である。文字通りには「彼らの海上での月は４だ。」のようになるが、ここでは期間を表している。

3.3.　数詞－名詞－決定詞－名詞

三つめのグループは、＜数詞-名詞＞の後ろに来るのが修飾語句ではなく、一つの独立した名詞句、つまり＜決定詞-名詞＞というものが続く場合である。

決定詞の一つめの例は冠詞であり、その構造は以下のように図式化される。

(IV) 数詞－名詞－冠詞－名詞

(13) Mai　ka　make ‘ana,　a　ke　ola
～から 冠詞 死ぬ こと ～まで 冠詞 生きる
hou　‘ana, ‘ekolu makahiki ka　lō’ihi.
再び こと 三　年　冠詞 長さ
「死んでから生き返るまで、長さは三年。」(1)

例(13)の下線部が数詞文の部分である。

決定詞の二つめは属格名詞（k-所有形）である。ここで登場する属格名詞（k-所有形）は先に登場したゼロ所有形とは異なる。k-所有形は ko 又は kā を代名詞か名詞句の前に前置することによって作られるもので、ゼロ所有形の語頭に k-を付けた形に相当する[2]。意味的、機能的に、定冠詞と属格名詞の二つを併せ持っている。このパターンの構造は以下のように図式化される。

(V) 数詞－名詞－属格名詞（k-所有形）－名詞

(14) He kanakolu dala　kona　uku,...[3]
三十　ドル　彼・彼女-属格 支払い
「その人の支払いは 30 ドル。」(9)

例(14)では kona が k-所有形である。

3.4　数詞－決定詞－名詞

４つめのグループは、＜数詞-決定詞-名詞＞であり、前節で述べたグループと比較すると、数詞の直後に来ていた、数詞後名詞がなくなった形である。

前節と同様、決定詞としては、まず、冠詞が来ることが出来る。その構造は以下のように図式化できる。

(VI) 数詞－冠詞－名詞

(15)He umikumalua ka　nui　o　keia　mau
１２　冠詞 数　属格 これ 複
mokupuni,...
島
「これらの島の数は１２。」(1)

冠詞以外に、決定詞として、属格名詞（k-所有形）も現れる。その構造は以下のように図式化される。

(VII) 数詞－属格名詞（k-所有形）－名詞

(16).., he ‘umikumamalima ko lakou　nui, ...
１２　彼ら-属格(k-所有形)　数
「彼らの数は１２人。」(8)

例(16)では ko lākou「彼らの」が属格名詞（k-所有形）である。

3.5　その他

その他、上記 4 つのグループにうまく当てはまらない例をここに列挙する。

まず一つめは以下のように図式化される構造である。

(VIII) 数詞－名詞－属格名詞（k-所有形）

先に述べたパターン(V)とよく似ているが、属格名詞（k-所有形）の後ろに名詞が来ない形である。

(17) A　inā　‘ehā keiki　kā　kekahi
そして もし ４　子供 属格(k-所有形) ある
makua,...
親
「そしてもしある親に 4 人の子供がいたなら」(9)

(18)‘Ehā　nō　niho ko　ka　dia,..
４　実に 歯　属格(k-所有形) 冠詞 鹿
「鹿は歯が実に 4 本。」(10)

例(17)と(18)ではそれぞれ、kā kekahi makua「ある親の」、ko ka dia「鹿の」が属格名詞（k-所有形）である。

k-所有形はそれ自体で「～のもの」という意味で名詞句的に用いることが出来ることから、このパ

2　例えば「彼の、彼女の」を表すゼロ所有形は ona であるが、同じく「彼の、彼女の」を表す k-所有形は kona となる。語頭の k-は定冠詞 ka 又は ke と関係があるといわれている。

3　10 以上の数を表す数詞の前には通常 he が付加される。またそれ以外の数詞にも he が付加される事がある。この he が何かについてはまだ結論が出ていない。

ターン（VIII）は（V)の変種のように見える。

その他のもう一つは代名詞が単独で数詞の後ろに来る数詞文の例で、その構造は以下のように図式化される。

(IX)　数詞－代名詞

(19)‘O Kipunuiaiakamau　mā, ‘elua lāua,..
　Kipunuiaiakamau　達　２ 彼ら
「Kipunuiaiakamau 達は、彼らは二人。」(1)

4　存在文タイプと等位文タイプ

4.1　存在文タイプ

この章では、第 3 章で列挙したいろいろな数詞文の構造を更に整理し、それに意味的な特徴も考慮して、意味的、構造的に異なる二つの大きなタイプに分類することを提案する。

一つめのタイプは存在文タイプと呼ぶものである。その典型的な構造と意味は以下のように図式化される。

存在文タイプの数詞文 構造： 数詞（X）－名詞（Y）－名詞を限定する語句（Z） 意味： Z で限定されるようなもの Y が X 個存在する。

存在文タイプの典型的な数詞文を用いて例示する。

(20)‘ehā mau ali’i　o　O’ahu　mamua aku
　４ 複　首長 属格 オアフ島 先に　方向詞
　o　Kakuhihewa,...
　属格 Kakuhihewa
「Kakuhihewa よりも先のオアフ島の首長は４人いる。」(1)

ここでは、「Kakuhihewa よりも先のオアフ島の、という修飾語句で限定されるような首長が４人存在する。」というように、存在の意味を表している。

このタイプには第 3 章で示したパターン(I)、(II)が属する。又、ゼロ所有形が名詞の前に来る形であるパターン（III）については、前にも述べたようにゼロ所有形は意味的に形の上でも、属格前置詞が付加された名詞と同様であるので、パターン(II)の変形と考えて、この存在文タイプに加える。

名詞を修飾する何らかの語句を伴う場合が一般的であるが、伴わないこともある。伴わない場合にも、位置等を示す語句が前の文脈に登場している場合が多い。例えば、修飾語句が前置されていることもある。

(21)Mai ia Liloa a hiki ia　Kamehameha, he
　～から Liloa ～まで　Kamehameha
　‘umikumamaha hanauma.
　１４　　世代
「Liloa から Kamehameha まで、１４世代ある。」(1)

ここでは、下線部の数詞文本体には修飾語句はついていないが、「Liloa から Kamehameha まで」という語句が前置されている。

4.2　等位文タイプ

二つめのタイプは等位文タイプと呼ぶものである。その典型的な構造と意味は以下のように図式化される。

等位文タイプの数詞文 構造： 数詞（X）－名詞（Y）－決定詞－名詞（Z） 意味： Z の数値を Y という単位で表すとその値は X である。

尚、図が煩雑になるので省いたが、名詞（Z)は後ろに修飾語句を伴うことがあるので、存在文タイプと等位文タイプの決定的な違いは数詞後名詞の後ろに決定詞が存在するかしないかということである。次に、等位文タイプの典型的な数詞文を用いて例示する。

(22)‘ekolu kapuai　ka　loa　o　kona　mau
　３　フィート 冠詞 長さ 属格 それの 複
　pepeiaohao
　角
「それの角の長さは 3 フィート。」(10)

ここでは、「角の長さの数値をフィートで表すとその値は 3 である。」ということになる。従って、この数詞文は「角の長さ＝3 フィート」という等式関係を示す等位文と考えることが出来る。このタイプには、パターン（IV)、(V)及び (VIII)が属する。

文脈等から分かりきっている場合、又は、純粋な個体数を表す場合などは数詞後名詞（Y）は現れない下記のような変種も用いられる。

これには第3章のパターン(VI)、(VII)が属する。

等位文タイプの変種 構造： 数詞（X）－決定詞－名詞（Z） 意味： Zの数値はXである。

その典型的な例を提示する。

(23) ‘eono paha　kapuai　kona　kiekie a
　　６　多分 フィート それの 高さ そして
　　he ‘umikumamālua ka　lō’ihi,
　　１２　　冠詞 長さ
　　「それの高さは多分６フィート、そして長さは１２。」[10]

下線部では、数値の単位（Y）が現れていないが、すぐ前の文で「６フィート」が登場しているため、ここも kapuai「フィート」という単位が了解されていると考えることが出来る。

(24)He umikumalua ka　nui　o　keia mau
　　１２　冠詞　数　属格 これ 複
　　mokupuni,...
　　島
　　「これらの島の数は１２。」[1]

ここでは（Z）の部分が「これらの島の数」となっており、（X）の部分「１２」は純粋な個数を表していて、単位は不要であるため（Y）にあたる名詞がないものと考えられる。

存在文タイプと等位文タイプの分類について述べてきたが、まだパターン（XI)の扱いについては述べてこなかった。まず、パターン（XI)の扱いについて述べる。

(25)‘O Kipunuiaiakamau　mā,　‘elua lāua,..
　　Kipunuiaiakamau　達　２ 彼ら-双数
「Kipunuiaiakamau 達は、彼らは二人。」[1]

例(25)は、代名詞が単独で数詞の後ろに来ているパターン（XI)の例である。これを存在文タイプのように「彼ら-双数が２つ存在する。」と分析すると合計４人いることになり矛盾する。ここでは「彼らの数という数値は４である」の「数」の部分を略した形と考えて、等位文タイプの変種と考える。実際、代名詞は<決定詞-名詞>と同様の分布を示すので、この解釈に無理は無いものと考えられる。

5. 結び

以上のように、ハワイ語の数詞文は意味的、構的に異なる二つのタイプ：（１）存在文タイプと（２）等位文タイプの二つに大きく分類できることが示された。次の課題としては、これらの２つのタイプへの分類が同系のポリネシア諸言語の数詞文にもうまく適用できるか試みたいと考えている。

謝辞

本研究は第 123 回日本言語学会（平成 13 年 11 月　九州大学）で発表したものを改定・拡張したものである。学会で貴重なコメントいただいた先生方に感謝の意を表したい。しかしながら、いただいたコメントの中には現時点では応じきれていないものも残っており、これについては今後の課題としたい。本研究は文部科学省科学研究費補助金奨励研究（A）「名詞文・数詞文等の基本構文に関する諸問題解明のためのポリネシア諸語間の対照研究」（課題番号 12710273）による研究成果の一部に基づいている。

文献

(1) Fornander, Abraham, Hawaiian antiquities and folk-lore, Bernice P. Bishop Museum Memoirs, vols 4 and 5, (1917-1918).
(2) Ka Lama Hawaii, Lahainaluna, (Hawaiian language newspaper).
(3) 塩谷亨、ハワイ語数詞の位置づけについて、室蘭工業大学紀要、第 47 号、(1997)、p163-166.
(4) Alexander, W.D., A short synopsis of the most essential points in Hawaiian grammar, Tokyo: Charles E. Tuttle Co., (1968).
(5) Elbert, Samuel H. and Mary K. Pukui, Hawaiian grammar, Honolulu: University of Hawaii Press, (1979).
(6) Kahiolo, G.W., He moolelo no Kamapuaa, (1978).
(7) Beckwith, Martha W. ed., Kepelino's traditions of Hawaii, Bernice P. Bishop Museum Bulletin 95, (1932).
(8) Beckwith, Martha W., The Hawaiian romance of Laieikawai, U.S. Bureau of American Ethnology, Thirty-third annual report, Washington D.C. (1911-1912), p285-677.
(9) Hawaiian laws 1841-1842, rerinted by Ted Adameck, (1994).
(10) Mookini, Esther T., O na holoholona wawae eha o Ka Lama Hawaii, Honolulu: Bamboo Ridge Press, (1985).